

視界の端で点滅する携帯のLEDライトが、俺を現実に戻した。...近々親戚が実家に行くらしい。連休の日程と返信の文面を考えながら、時間を見る。

「...浅島さん、帰りー」

「帰りたくない」

—こいつ、どういうつもりなんだよ

いつもだし、今日に限っては強めの酒止めきれなかった俺も悪いし、別にいいけど。

そうじゃなかったら、どうなって—どうしていたか。

...かける言葉は決まっている。

「無理だから。困るから帰って」

「嫌。最低でもその猫かぶりやめるまでは」

「...そんなつもりは、無いよ」

言葉を選んでいるだけだから、本当にそんなつもりはない。

ただ、浅島が言ったのでさえなかったら、酔っぱらいの発言だと割り切るのに。

結局これだ。自分のチョロさに呆れていたところで、唐突に言葉が聞こえてきた。

「言葉が乱暴なことくらい、どーでもいいんだよ？それ以上に、優しいのを実感してきたから。...その度、好きって思ってきた、からー」

耳を疑って、悩んだ。纏まらない思考のまま。

「後出しになるのかよー...」

「へっ？」

—記憶が飛んだら、飛んだでいい

「好きだよ、浅島」